1909 Column

相談したいと思える関係づくり～それまでを考え，信頼を得る

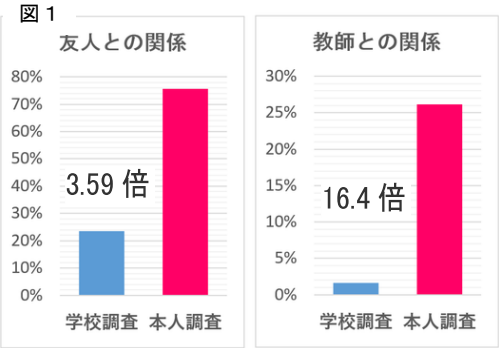
2019．9月

この５年間，本センター通室している子どもや保護者から，時々，気になることを聞くようになった。それは，友だちとの関係の不安や悩みを訴えることもあるが，教師のあの一言がショックだったとか，教師から理解されていないような言い方をされたなどの教師との関係だ。時に，通室してくる子どもが，担任や担当に向けた文句を言うこともある。

文科省では，毎年，学校における，いじめ，暴力行為，不登校，自殺などの現況が集約される「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を実施しており，まもなく５２回目である平成３０年度の結果が公表されると思う。この中には，子どもたちの不登校理由や不登校を続けている理由など，踏み込んだ分析がある。しかし，不登校の子ども本人の意見や気持ちを聞かれないまま調査が行われており，不登校の理由が学校の判断として結果として載るのは，おかしくないか。

少し古いが，公立中学校３年生の不登校経験者の追跡調査結果が「平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書」として，平成 26 年（2014）年度に公表（図１）されている。不登校理由を複数回答可として，不登校経験者 1,604 名のうち 26.2%（複数回答可）が「先生との関係」を理由に，また学校側の調査として不登校生徒 99,959 名のうち 1.6%が「教職員とのめぐる問題」としている。この本人調査と学校調査の間になんと，16.4 倍の開きがある。

図１



学校調査と本人調査の差

これらの結果から，不登校生徒は教職員にも要因があると思っているが，教職員はそうは思っていないという認識の差を自覚することが重要である。教職員と本人が互いに異なる不登校理由を抱いておれば，会話はもちろん，相談もできない。これでは，学校がいくら教育相談週間などと銘打っても相談はしないだろう。相談者は，心に何らかの傷を負い，将来への不安を感じているということを前提にしてほしい。相談へのためらいよりも，相談したいことの方が大きくなって初めて相談までにたどりつけるもの（図２川上康則 2019Facebook）である。

図２

学校関係者は，相談してみようかなと思ってもらえる信頼関係を築き，子どもや保護者の不安や怖さ・ためらいなどのハードルを下げる努力を考える必要がある。不適切な言動や不登校などを子どもが，これ以上，傷つくまいとする行為と考えると，やはり信頼できる教師・相談員等がそばに居ることが大切だ。信頼があって初めて，その子どもをその気にさせられる。傷ついている子の信頼を得るには相当の時間がかかることを覚悟したい。子どもが「自分を認め，分かってくれる大人」「苦しい時に自分を見捨てない大人」と思ってくれる我々でありたいものである。(芝)

５つの傷
1　拒絶による傷
2　見捨てによる傷
3　侮辱による傷
4　裏切りによる傷
5　不正による傷
リズ・ブルボー　2006

参考文献・引用
不登校「先生が原因」認知されず－学校調査と本人調査のギャップから考える－（内田良2016）
発達につまずきがある子どもの輝かせ方（川上康則2018）
五つの傷―心の痛みをとりのぞき本当の自分になるために（リズ・ブルボー2006）